

# 被災地の復興をめぐる場所の喪失と再構築

— 瀬尾夏美「二重のまち」を読む —

中島 弘二\*

Koji NAKASHIMA

Loss and Reconstruction of Places in Rikuzentakata:  
Reading Natsumi SEO's "Nijyu no machi"

## はじめに

東日本大震災から10年が過ぎ、復興庁(2021)によれば被災地における住宅再建、災害公営住宅の建設、防災集団移転、区画整理など復興関連のまちづくり事業はそのほとんどが終了となっている。しかしながら、それらの復興事業によって被災者は本当の意味で「場所」を取り戻したと言えるのか。

本発表で研究の対象とする陸前高田市は、東日本大震災の津波により市街地の大半を破壊され、死者・行方不明者1,761人、家屋損壊8,035戸という大きな被害を受けた(数値はいずれも2020年9月末時点)。その後、被災市街地土地地区画整理事業によって全体面積124.6ha、最大高度12.3mまでかさ上げされた新市街地の建設を中心とする大規模な復興事業がおこなわれたが、当初の予定通りに住民の移転が進まず、高田地区の造成宅地の未活用率は61.5%におよぶ(無署名 2021)。この背景には、その規模の大きさゆえに復興事業に長い時間がかかったこと、そのため復興過程期に市街地外縁部に自主再建住宅の建設が進んだこと(矢ヶ崎・吉次 2014)や、自営業者の高齢化による事業再開の断念等の要因があると考えられる。

そうした中で、被災した人々にとって「復興」とは何を意味するのか、新しく作られたまちは被災した人々にとってどのような場所なのか、被災した人々にとっての場所の経験とはどのようなものか、被災地の復興過程において場所が持つ意味は何かということが、今あらためて問われていると言えよう。

東日本大震災の被災地については人文社会科学から自然科学までさまざまな分野で多くの研究が行われており、人文地理学においても例えば津波災害に対する地域社会のレジリエンスに関する研究(矢ヶ崎 2017, 2019)や被災地の復興プロセスにおける都

市空間の再編成に関する研究(矢ヶ崎・吉次 2014)、仮設住宅入居者の社会経済状況と生活再建に関する研究(菅野 2012, 2015)などいくつかの研究が蓄積されている。そうした中で、被災地における復興のあり方を歴史的視点から問い直す研究があらわれてきた。農業経済学者や社会学者、人類学者、歴史学者らによる学際研究の成果である『復興に抗する——地域開発の経験と東日本大震災後の日本』(中田・高村 2018)は、東日本大震災被災地における開発から復興へと至る歴史的過程を人々の生活世界から多面的に捉え直すことの必要性を唱える。同様の視点は、日本近現代史を専門とする歴史学者らによる『「生存」の東北史——歴史から問う3.11』(大門ほか 2013)、『「生存」の歴史と復興の現在——3.11 分断をつなぎ直す』(大門ほか 2019)においても提起されており、東北各地における地域医療や生活運動、農業、漁業、文化財・歴史資料の保全の営みを「生存」の歴史学の視点から捉え直し、現在とつなげる試みが展開されている。これらの研究は、被災地における「復興」を、ゼロから新たに作り直すものとしてではなく、それぞれの地域の歴史的過程の中で形成されてきた様々な事象間のつながりにおいて捉え直そうとしている。このように、被災地の復興を生活や生存の歴史的連続性の視点からとらえようとするアプローチは、復興事業を地域開発の新たなビジネスチャンスととらえるような新自由主義的なアプローチに対する批判として重要である。

一方、このようなマクロスケールにおける歴史的連続性に着目するのではなく、徹底的に「個」の視点から生者と死者のつながりに着目して被災地に向き合おうとする稀有な研究がある。批評家の若松英輔は、「死者への論究なくして、東日本大震災の問題は終わるどころか、始まらない」(若松 2021: 29)と指摘する。東日本大震災から10年の月日が経つ

\* 金沢大学人間科学系 教授

て、亡くなった家族や愛する人のことを忘れるどころか、むしろますます強く深く思うようになったという被災者の声をしばしば聞く。それは単に悲しいとかつらいということではなく、被災後の10年間を死者とともに生きてきたということ、すなわち、単に過去の記憶をひきずるだけではなく、生き残った人々は日々、死者と向き合いながら生きてきたということの意味している。

ナチス強制収容所において、最後まで会うことはかなわなかった(そしてすでに殺されていた)妻のことを思い、心の中で妻と会話することで、強制収容所での過酷な日々を生き抜くことができた精神科医のフランク(1971)に言及しながら、若松は「生きることそのものが「死者」との交わりであり、協同であることを、フランクの著作ははっきりと伝えている」(若松 2021: 51)と述べる。たとえ愛する人がすでに亡くなっていたとしても、その人のことを思い続けることで、人は生き続けることができる。死者は、生者と向き合い、生者に寄り添う不可視の「隣人」であるという意味において、被災後の世界における根源的な存在者にほかならない。だからこそ、こうした根源的な存在者としての「隣人」を置き去りにして、自分たちだけが日常性を取り戻していくことに、生き残った人たちはためらいと後ろめたさを感じるのである。

若松は「真の復興が実現される時、そこには死者の協同を欠くことはできない」(若松 2014: 36)と言う。東日本大震災の被災地では、岩手県陸前高田市高田松原地区と宮城県石巻市南浜地区に国営の追悼・祈念施設が建設された<sup>1)</sup>。「東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂」を目的とした両施設は、しかしながらその荘厳さとは裏腹に、若松が言うような死者との「協同」とは程遠いものとなっているように思われる。生き残った人たちにとって、死者を悼む行為は日常の生活の中で日々おこなわれるきわめて個人的な営みであり、このような荘厳なモニュメントをたまさか訪れて、顔の見えない不特定多数の死者に向けて祈りを捧げるようなものではない。生き残った人たちにとっては、愛する人と暮らした自宅の跡や毎日通った仕事場の跡、そして愛する人が亡くなったその場所が重要なのであり、それらを代表する施設をどこか別のところに作ることで代替するようなものではないのである。その点で、復興における場所の意味を考えることが重要となるのである。

こうした問題を考えるうえで、近年の地理学における場所をめぐる議論を参照したい。熊谷(2019)は

パプアニューギニアでの長年のフィールドワークにおいて、調査の対象としてきた場所の変容と(再)構築に調査者自らが深く関わる経験を通じて、関係性の束としての場所、プロセスとしての場所という考え方を提起している。場所とは空間的な近さによって生まれる人と人、人と事物、事物と事物の関係性の束であり、固定的なものではなくつねに生成する/されるプロセスとして捉えられるものである(熊谷 2019: 43-44)<sup>2)</sup>。熊谷のこのような場所に対する見方は、主としてマッシーの多様で異種混交的な場所論を下敷きにしたものである。マッシー(2014)は「ともに投げこまれていること(throwntogetherness)」という概念を用いて、ある時間、ある空間のもとで、人間と人間以外の事物や生き物などの多様な存在者が偶発的に出会い、お互いに交渉を重ねることで、そのつど作りかえられていく開かれたプロセスとして場所をとらえている。そこでは、場所は首尾一貫した固定的なアイデンティティと結びつけられるものではなく、つねに構成の過程にある先進的な政治の可能性に開かれているのである。森(2021)はこのようなマッシーの場所論をさらに発展させて、「地(ジオス)」なるものと生ある物との協働を通じた新たな世界の創造というポリティクスの可能性を提起している。

以上の議論をふまえると、被災地の復興について検討するうえで、場所の問題が重要になると考えられる。なぜなら、被災地において人々は被災前から被災時、そして被災後の復興という一連のプロセスを通じて日々刻々と移り変わるそれぞれの場所と向き合って生きてきたのであり、そこでは固定的で一貫性のある万人にとって共通の場所というものは存在しなかった。ある人にとっては、かつての自宅跡の更地が、また別の人にとっては無残になぎ倒された海岸の松林の跡地や、薄い合板1枚で隔てられプライバシーはない代わりに日常のお付き合いのあった仮設住宅が、それぞれに重要な意味を持つかもしれない。それらの場所は一人ひとりがそれぞれに固有の経験を通じてさまざまな人やモノ、そしてときには死者と関係を取り結ぶことによって構成されたものであり、時にとても愛おしく、またとても悲しく、切なく思い出される、つまり生きられる空間なのである。そうした生きられた空間としての場所を考慮することなしに復興の問題を論じることが、一人ひとりにとっていかに暴力的なことなのかは想像に難くない。もちろん、被災した人たちにとって一刻も早い復興は不可欠なことだろう。住まいと職場、そしてまちの復興なしに、人々の生活を立て直すことは難しい。しかし、それは一人ひとりにとつ

ての場所の意味を消去して、万人に妥当する新たな意味を上書きするようなものであってはならないはずだ。

以上の問題意識に基づいて、本稿では2011年の震災以降、ボランティア活動や著作活動、映画製作、ワークショップの開催など多方面で活動しているアーティストである瀬尾夏美による著作「二重のまち」の読解を通じて、被災地の復興をめぐる「場所」の喪失と再構築について検討することを目的とする。なお、「二重のまち」はフィクションであり、聞き書きやインタビューに基づくドキュメンタリーや研究書ではない。それは、瀬尾自身の被災地での体験や地元の人々との交流をもとにして作られた作品である。しかしそれは、復興事業のかさ上げ工事によって埋められてしまい、不可視となってしまった被災地のもう一つの場所を、瀬尾の地理的想像力を通じて描き出そうとする試みでもある。本稿は、そのようなフィクションの検討を通じて、被災地の復興における地理的想像力の可能性を模索してみた。

なお、本稿で引用・掲載するテキストや画像は、すべて作者、撮影者の許可を得たものであることを付言しておく。

## I. 『波のした、土のうえ』から「二重のまち」へ

### 1. 瀬尾夏美と「二重のまち」

「二重のまち」の著者である瀬尾夏美は東京藝術大学大学院修士課程(絵画専攻)を修了後に、東日本大震災のボランティアに参加したことをきっかけに、2012年から3年間、陸前高田で暮らしながら創作活動を行った。2015年からは東日本大震災の記録活動を行う社団法人NOOKを立ち上げ、仙台に拠点を移した。同大学院修士課程修了(先端芸術表現専攻)の映像作家の小森はるかとはアートユニットKomori haruka + Seo Natsumiを結成し、近年は映画や書籍、ワークショップ、展覧会など多彩な芸術活動を展開しているアーティストである。

瀬尾がこれまでに発表した作品のうち主なものを挙げると、著作(いずれも単著)として『二重のまち-二〇三一年、どこかで誰かが見るかもしれない風景』(瀬尾 2017)、『あわいゆくころ-陸前高田、震災後を生きる-』(瀬尾 2019)、『二重のまち/交代地のうた』(瀬尾 2021)が、映像作品として小森はるかとの共同制作による『波のした、土のうえ』(小

森・瀬尾 2014)、『二重のまち/交代地のうたを編む』(小森・瀬尾 2019)などがあるが<sup>3)</sup>、これら以外にも、瀬尾と小森のユニットによるテキストや絵画、映像を組み合わせた数多くの展示や上映会を全国各地で開催している。

本稿で取り上げる「二重のまち」は、最初、2015年11月から2016年1月にかけて水戸芸術館 現代美術ギャラリーにおいて「クリテリウム91瀬尾夏美 波のした、土のうえ/二重のまち」と題する展示として発表され、ついで、そこで発表されたテキストとイラストをまとめた全41ページの小冊子『二重のまち-二〇三一年、どこかで誰かが見るかもしれない風景』が2017年に自費出版で刊行された。さらに、2018年に陸前高田でおこなったワークショップで参加者から聞いた話をもとに瀬尾が記した「交代地のうた」と、瀬尾自身が記したツイートの内容をもとにまとめた「歩行録-二〇一八年三月-」を加えて、上記の『二重のまち』と合わせて一冊の著作として刊行したものが『二重のまち/交代地のうた』(瀬尾 2021)である。以下、本稿ではこれらの作品を総称して「二重のまち」と記し、個別の作品については個々のタイトルを記すこととする。

2017年の『二重のまち』は、「二〇三一年、どこかで誰かが見るかもしれない風景」という副題を付された短編の物語で、イラストと文章で構成されている。震災から20年後の2031年の被災地を舞台として、かさ上げ工事などで造られた“あたらしいまち”と、はるか地の底になった“かつてのまち”で暮らす人々の姿がそれぞれ描かれており、瀬尾自身が陸前高田で出会い、話を聞いた実在する人物のエピソードをもとに創作されたものである。2031年の「春」から始まり、「夏」、「秋」、「冬」とそれぞれの季節ごとに美しい印象的な9枚のイラストとともに、登場人物の独白や会話がたんたんと記されている。

一方、2021年の『二重のまち/交代地のうた』においては、前述の「交代地のうた」と「歩行録-二〇一八年三月-」が加えられたほか、「二重のまち」には新たに追加された分も含めて全部で39枚のイラストが掲載されている。テキストの方は2017年の『二重のまち』と同じで、書式上の軽微な変更のほかは大きな変更や追加はみられない。

「二重のまち」の詳細な内容は次章で紹介するが、その前に、「二重のまち」に先立って公開された映画『波のした、土のうえ』を紹介することで、「二重のまち」につながるライトモチーフについて言及したい。

## 2. 「第二の喪失」としてのかさ上げ事業

「二重のまち」が最初に水戸芸術館 現代美術ギャラリーにおいて発表された2015年の前年、2014年に、瀬尾夏美と小森はるか映画『波のした、土のうえ』を制作・公開している。この映画は、陸前高田に暮らす3人の住民の語りを通して、被災から3年8ヶ月を経た陸前高田を描き出したものである。この映画は、被写体となる住民に繰り返しインタビューをしたものを瀬尾が物語に書き起こし、それをもう一度住民本人に読んでもらい、本人が訂正や調整、書き換えをおこなったものを朗読してもらうという形をとっている<sup>4)</sup>。そのため、この映画は瀬尾と小森と住民が共同で作った作品と呼べるものである。

被災市街地土地地区画整理事業によって2014年4月から始まった市街地のかさ上げ工事は、津波によって破壊された「かつてのまち」跡のうえに膨大な量の盛り土をおこない、最終的に最大約12mの高さまで市街地をかさ上げするという途方もない大事業であった。海岸に面した平地以外にまとまった面積の市街地を築くことができない陸前高田市において、巨大規模のかさ上げをおこなうことは止むを得ない選択だったのかもしれないが、それは被災した人々にとっては「第二の喪失」をもたらすものでもあった。

被災後に巨大な草はらのようになったかつてのまち跡は、被災した人々にとってかけがえのない人や時間まつわる記憶のよりどころであり、また津波で亡くなってしまった愛する人々を悼む場所でもあった。「平らなまちには、ぼつりぼつりと花がたむけられている。亡くなった誰かへ、きっとその人の家族や友人が通っているのだろう。その花があることによって、ここに確かに誰かの生活があったということ、私はやっと知ることができる」（『波のした、土のうえ』ナレーションより、以下同様）。一見すると、雑草が生えたただの更地にしか見えない場所も、大切な誰かを亡くした人にとっては、死者とつながることのできる大切な場所なのである。

映画に登場する3人の住民のうちの最初の女性は、両親と暮らした実家が津波で流されて今は更地になってしまった場所を、線香をあげるために訪れた際に、津波で亡くなった両親が最後に着ていた服をもってきて、それを地面に敷いたブルーシートの上に広げる。「最近、父にまつわる人が私の周りに現れるの。だから何か言いたいことがあるのかなって、考えてただけどね。きっとここに帰ってきたかったんだって、そう思ったから、私、ここに連れてきたの。…（中略）またここに来てもいいよね」。この

女性にとって、この更地の場所は津波で亡くなった両親と出会い、対話するためのかけがえのない場所だった。しかし、その場所が、かさ上げ工事によって埋められてしまう様子に対して、彼女は怒りを隠さない。「津波のあとのある日にね、ここに来たら、私の家がこんな土の山になってたの。人の家になってことしてくれるの。人の思い出の上になんてことしてくれるんだって、私思った」。「私に必要なのは、今日の前で作られている新しいまちなのか、わからなくなる。私が欲しくてたまらないのは、私が暮らしたあのまちそのもの」。

2人目の住民は、自分の生まれ育った地区で消防団員をつとめた男性で、集落の住民の3分の1が津波で流されてしまい、子どもの頃から仲の良かった近所の仲間も失ってしまった。今は別の地区に引っ越してしまったけれど、本当はこの地区に戻って来たいと思っている。「本当はここき戻りたいの。ここで生まれて、ずーっとここで暮らしたんだもん。でも、ここに高台ができるまで、あと何年もかかるというからね。女房は「もう、ここ、やんだ」って、「また津波きたらどうすんだ」って言うんだよね。たとえここに戻ってきても、一緒に暮らした仲間もういないし、それが一番悲しいの。私は一体どこに戻りたいと思っているんだろうか。私の戻りたい場所がどこにあるのかが、わからないと思う時がある。」「私はもう何も失いたくない。津波であんなになくなったのに、まだ失うものがあつたのかと驚いてしまう。…（中略）それでも、ここはずーっと私の特別な場所、そう思う。」

3人目の住民は、被災跡地にコスモス畑を設置する活動をおこなっている女性で、自分の住んでいた地区の道路の両側に地区住民によって紫陽花が植えられているところがあって、それをもう一度作りたいと思ってこの活動を行なっているという。そして、いずれかさ上げで埋められてしまうところに花畑を作る意味について、次のように説明している。「なんで工事が始まるようなところにわざわざ手をかけるんだって、そう思う方もあるかもしれない。けどわたし、どうしてもこれがやりたかったの。私たちが暮らした場所に花をたくさん咲かせたら、またみんながここに集うようになるかもしれないって。そう思ったから」。この女性は生き残ったものの使命として、亡くなった人たちを放っておくことはできない、その人たちがいた場所をこのままにしておくわけにはいかないという思いから、花畑を作ろうとしているのである。しかし、その一方で、かさ上げ工事によってかつてのまち跡が次々と埋められて



いってしまうことに対しては次のように述べる。「まちぢゅうのあちこち、どこもかしこも工事をしている。どの山もみんな削られて、波をかぶった低地には土が盛られる。ここも変わってしまった。あっちもなくなっている。みんなの思い出の痕跡を探す方法が、あたしにはもうなくなってしまうかもしれない」。

この3人の住民の語りの中では、2014年当時の更地のまちは、かつてみずからの暮らし(経験)が営まれた場所であると同時に、死者とつながる場所でもあったことが示されている。そして、そうした場所がかさ上げで失われてしまうことに対する不安や憤りとともに、もはや取り戻せない昔のまちと、いま築かれつつある新しいまちの狭間での葛藤が示されている。瀬尾(2021: 238)は、かけがえのない人や時間にまつわる記憶のよりどころであると同時に、生者と死者の出会いの場でもあるこうした場所が、復興事業に伴うかさ上げ工事によって失われてゆくことを「第二の喪失」と呼ぶ。そして、こうした喪失感を少しでも和らげてほしいと願って、かつてのまちと新しいまちをつなぐための物語として「二重のまち」を書いたと記している(瀬尾 2017: あとがき, 2021: 240)。

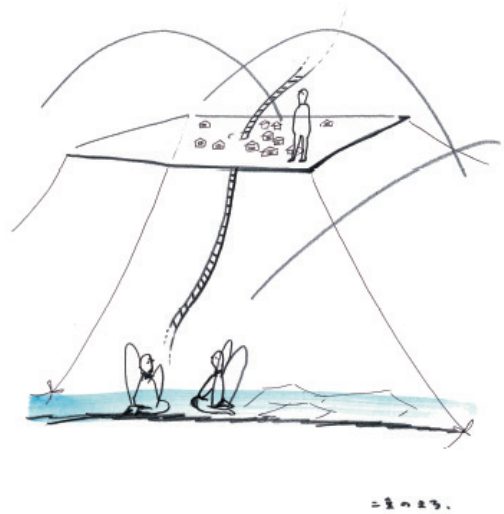


図1「二重のまち」扉のイラスト

中にある広場に向かい、その広場の中央に建てられた石碑の裏側から、地下に向かって下る薄暗い階段を一步一步降りていく。すると、突然、視界が開け、色鮮やかな一面のお花畑が現れる(図2)。

## II. 「二重のまち」という作品

2017年と2021年の「二重のまち」の著作には、どちらも見返しの後の扉に、「二重のまち」と題された図1のようなイラストが描かれている。ここには、かさ上げ工事によって新しくつくられたまちの下にもう一つのまちがあって、そこでは震災で亡くなった人たちが暮らしている様子が描かれている。

### 1. 「春」

続く2031年「春」の冒頭には、上のまちに暮らす子どもの語りが記されている。

僕の暮らしているまちの下には  
お父さんとお母さんが育ったまちがある  
ある日、お父さんが教えてくれた

ぼくが走ったり跳ねたりしてもびくともしない  
この地面の下にまちがあるなんて  
ぼくは全然気がつかなかった

(瀬尾 2021: 11)

このあと子どもは父親に連れられて、まちの真ん

広い、広い、一面の花畑がそこにある  
色とりどりの花  
(中略)  
見わたすと、ぼつりぼつりと人影がある  
顔はよくみえない  
みんなしずかに、ゆっくりと歩いている

(瀬尾 2021: 17)

そこは父親がかつて暮らしていた家があった場所である。今はうすピンク色のコスモスが咲いているだけの草っぱらだが、父親は「ここが玄関」、「ここが居間」、「ここが勉強部屋」と楽しそうにみて回る。

お父さんは、足元のコスモスを二本  
ぼきりと折って、こちらに戻ってくる  
そうして、ぼくの足もとに立っていた緑色の筒にいった

このまちがあるから、上のまちがあるんだよ  
そう言って、胸の前で手を合わせる

(瀬尾 2021: 25)

ここには、新しくつくられた上のまちと、かつて父



図2 地底に咲く (瀬尾 2021: 18-19)

親が暮らした下のまちが秘密の階段でつながっていること、そして下のまちには今も亡くなった人たちが静かに暮らしていることが暗喩的に描かれている。

## 2. 「夏」

陸前高田では毎年8月7日に七夕祭りが盛大におこなわれてきた。東日本大震災で一時は途絶えたが、ほどなく復活し、復興のシンボルとしても注目されてきた。「二重のまち」の2031年「夏」では、この七夕祭りの様子が描かれている(図3)。

土の下で迎える何度目かの八月七日  
 今日も上からは、太鼓と笛の音が響いてくる  
 (中略)  
 慣れ親しんだ笛の音が聞こえる  
 太鼓の音が低く響くのは、太鼓を地面におろしているからだろう

(瀬尾 2021: 40)

みんなが、大きな輪になっていく  
 上から聞こえる音に合わせて、ゆっくりと踊り始める  
 (中略)  
 目の前にあるこの光景を、私はとても美しいと思う  
 だからきっと、この上にある光景もまた、美しい  
 そう、想像する

(瀬尾 2021: 48)

ここでは「春」とは異なり、下のまちに暮らす住民の視点から、祭りの様子が描かれている。上のまち

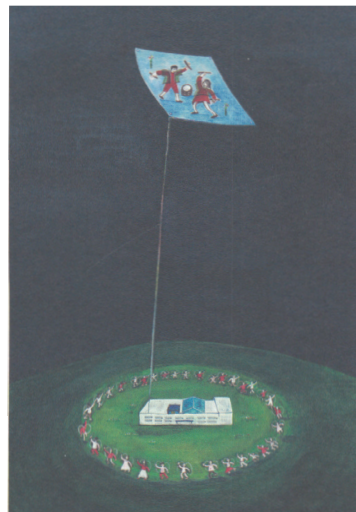


図3 夏祭り (瀬尾 2021: 43)

でおこなわれる祭りの様子は「下のまち」に残った人たちにも、地面を通して太鼓や笛の根、踊りの足音が伝わってくる。そしていつしか「下のまち」の人たちも上から聞こえる音に合わせてゆっくりと踊り始める。「上のまち」がどんなものなのか、「下のまち」の人たちにはわからないが、それはきっとことごと同じようにうつくしいものだと思像する。亡くなってしまった人たちはもはや上のまちで暮らすことはできない。しかし、地面を通して感じられる上のまちの祭りの様子は、しっかりと下のまちの人たちにも伝わり、二つのまちをつなげているのである。

瀬尾夏美氏への筆者の聞き取りによれば、「二重のまち」を描こうと思った最初のきっかけは、この七夕祭りだったそうである。七夕祭りは、本来、先祖や亡くなった人々の供養としておこなわれるもので、そのため「ランバン」と呼ばれる竹飾りを山車の上に高く掲げて、先祖の霊が天上から降りてくる時の目印にするとされている。しかし、それでは震災で亡くなった人たちが暮らす下のまちとつながることができないと考えた瀬尾は、上記のような祭りの音や振動という媒介を通して、上のまちに暮らす生者と下のまちに暮らす死者をつなげようとしたのである。

### 3. 「秋」

「秋」はふたたび上のまちの住民の視点に戻る。上のまちに暮らすおじいちゃんとおばあちゃん、そして彼/彼女らの孫と思われる子どもの会話から始まる。

おばあちゃんは一年中花の手入れをしている  
なぜそんなにがんばるの、とたずねると  
これは地底から持ってきた花だからねえ、と答える  
地底人と約束でもしているの、と聞くと  
どうだろうねえと笑う

(瀬尾 2021: 56)

おばあさんは地底からもってきた花を上ので育っているという。ここでは、祭りの音や振動と同じように、花が上のまちと下のまちを結びつける媒介となっている。そして、花と並んで石もそうした役割を担っていることが次に記されている。

これは、地底の石だという  
本当はもっともっと大きな石だったのだけれど  
大きすぎて持ってこられないから  
こうしてすこしだけ持ってきたんだって

(瀬尾 2021: 40)

おじいさんとおばあさんの家の玄関脇の祭壇に置いてある石(図4)は、かさ上げで埋められて今は土の下になってしまった大きな石の一部を持ってきたものだという。その大きな石のまわりにはいつも近くの人たちが集まって、みんなで話を聞きあったり、お茶を飲んだりして楽しんでいたという。おじいさんとおばあさんにとっても、その大きな石は震災前の暮らしを思い出させてくれる大切なものだったので、埋められてしまう前にその一部だけを持ってき

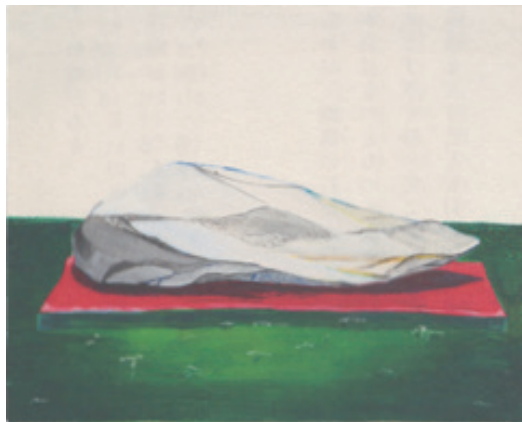


図4 地底の石 (瀬尾 2021: 60)

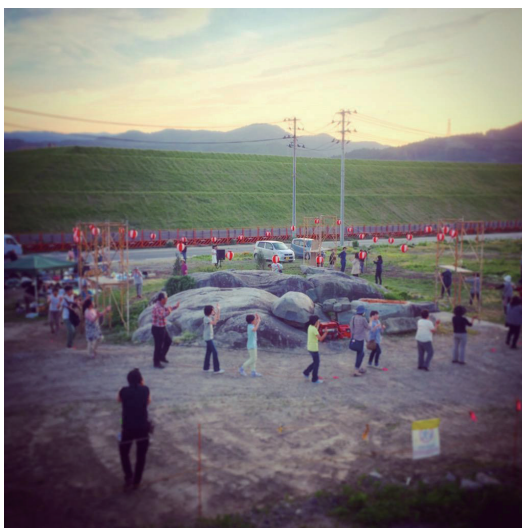


図5 五本松ありがとう会 (撮影者：小森はるか)<sup>51</sup>

たという。

実はこのエピソードは実話に基づいている。陸前高田市の森前地区にかつて「五本松の巨石」という大きな石があって、その場所は、地域住民の憩いの場として親しまれていたが、かさ上げ事業にともない埋められてしまうことになり、その前に森前地区の住民60人あまりが集まって、巨石への感謝を込めて盆踊りや思い出スライドショーなどをおこなう「五本松ありがとう会」(図5)を開催したという<sup>6)</sup>。

「二重のまち」では、下のまちでかつてとり結ばれていた巨石と地域住民の関係が、地底から持ってきた小さな石を通じて上のまちにもつなげられている。

石のまわりにはいつも人が集まってね  
みんなでお話を聞きあったり、お茶を飲んだりしてね

子どもたちが石の上で遊んだりしてね  
 (中略)  
 石にはちいさなくぼみがある  
 そっと耳を近づけると、波みたいな音がする  
 わたしは正座をして、石をなで、手を合わせる  
 (瀬尾 2021: 61)

ここでもまた、石を通じて、上のまちと下のまちが結び付けられている。

#### 4. 「冬」

「春」から「秋」にかけては、秘密の階段や祭りの鼓動、花、石などを通じて、上のまちと下のまちが様々なつながる可能性が示されていた。しかし、「冬」の章では一転して、上のまちに対する違和感や不安感が記されている。

角ばったまちのふちまで進む  
 まっしろい防潮堤、囲われた灰色の海  
 削られて四角くなった山やま  
 見慣れたあの曲線たちは、どこに行ったのだろう  
 (瀬尾 2021: 77)

かさ上げ工事によって人工的に作られた新しいまちは直線で方格上に区切られた区画が並び、その縁はいまだ更地のままの低地と10メートルの高度差をもって区切られている(図6)。白砂青松の松林はコンクリートの巨大な防潮堤に姿を変え、かさ上げよりの土砂を掘削した周囲の山々は四角く削られている。こうしたかさ上げ後の景観に対する違和感が、ここには率直に示されている。

にぎやかになればなるほど  
 亡くなった息子が気がかりになる

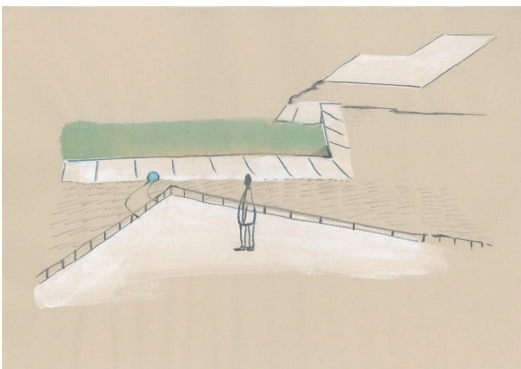


図6 角ばったまち (瀬尾 2021: 76)

このまちの下に、この土の下に  
 置いてけぼりにしてしまったんじゃないか  
 (瀬尾 2021: 78)

上のまちの整備が進み、ショッピングセンターや公共施設が建設され、人の賑わいも戻ってきたことは裏腹に、津波に流されていまだに行方不明のままの息子のことが気になってしまう。自分たちは、「復興」という名の開発競争に気を取られて、死者のことを忘れてしまっているのではないのか。

あたらしいまちであたらしい家族  
 あたらしい暮らし  
 それは、手放して喜ばしいことであるはずだ  
 なにわたしは、どうにも宙ぶらりんの気分のままだ  
 (瀬尾 2021: 81)

死者を置き去りにしたままで自分たちだけが幸せになることへの違和感とためらいがここには示されている。若松が言うように、死者との協同なしに、本当の意味での復興は実現されないのである。そうした違和感とためらいをふまえたうえで、著者は次のように自らに問いかける。

まっしろい防波堤、囲われた灰色の海、削られた山やま、奇妙に角ばった風景  
 これを、愛せるときがくるだろうか  
 (瀬尾 2021: 89)

ここには、これまでもつぱら過去とのつながりで新しいまちを理解しようとしていた本書のライトモチーフに根本的な転換が訪れることが示唆されている。そのことは、次の記述において明確なものとなる。

夕やけのチャイムが鳴る  
 孫を迎えに行かなくては  
 彼らにとっては、この風景がかけがえのないふるさとなる

それでいい  
 きっと

(瀬尾 2021: 90, 92)

今いる子どもたちの未来を考えたときに、この奇





図7 未来の風景 (瀬尾 2021: 91)

妙に角ばった風景がふるさととなる時がいつかやってくることを示唆されている。それは過去から未来への、死者から未来の子どもたちへの、視座の転換を引き受ける覚悟と言ってもよいだろう。角ばったまちの風景(図6)から丸い曲線で描かれる風景(図7)への変化は、そのことを示していると思われる。

### III. 「地質学的生」としての場所の経験

陸前高田の復興事業における「まち」の時間的・空間的な関係を整理すると、まずは時系列に沿って、A) 被災前の「まち」、B) 津波によって破壊され更地となった被災後の「まち」、そしてC) かさ上げによって新たに生み出された「まち」という3つの「まち」を区分することができる。これら3つの「まち」は、復興事業のかさ上げ工事によって、ちょうど地層が積み重なったような層序的關係にある。もちろん、被災前の「まち」A)は津波で破壊され、被災後の「まち」B)は土の下に埋まってしまっており、表面的にはそれらを見ることはできない。しかし、遺跡や化石がそうであるように、それらは時系列に沿って地層のように積み重なり、掘り起こせばその姿をあらわすのであり、決して消えてなくなってしまうわけではない。復興事業のかさ上げ工事によって新しく作られた「まち」C)は決してゼロから作り上げられた場所ではなく、A)とB)の「まち」の上に築かれた地質学的な場所であり、それぞれの場所は地面を通してつながっている。

「二重のまち」は、このような地質学的な場所の関係を大きく「上のまち」と「下のまち」という二重構造において見事に描き出している。それらの関係は、

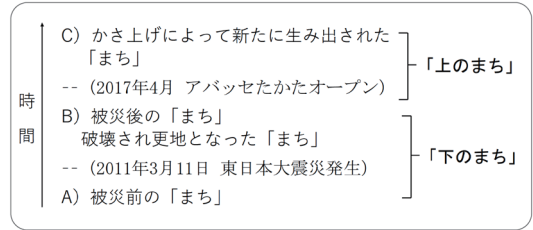


図8 「上のまち」と「下のまち」

図8のように整理されるだろう。「上のまち」と「下のまち」はちょうど地層が重なるように連続し、それらは物質的な想像力を介してつながっている。「下のまち」における花畑は死者と生者をつなぐ場所であり、生者が死者と出会う場所である。また、夏祭りの太鼓や笛の根、踊りの足音、地底の石とその音・手触りは、モノと身体を通して「上のまち」と「下のまち」をつないでいる。瀬尾は、このようなさまざまな物質的想像力を駆使しながら、「上のまち」と「下のまち」の時間的・空間的な連続性・継続性をあぶりだすことで、復興事業によって新たに作られた「上のまち」を再解釈し、そこにおける「生」のあり方を「死者」や人間以外の事物とのつながりにおいて再定位しようとしている。地理学者のYusoff (2013)は、人間と人間以外の物質的な存在が鉱物学的に分かち難く結びついた生のあり方を「地質学的生 (geologic life)」と呼び、人間の生が非有機物や死んでしまったものなど「非生命」と結びつくことで成り立っていることを指摘し、そこに新たな主体性を見出そうとする。瀬尾が「二重のまち」において物質的想像力を用いて描き出そうとした生者と死者の結びつきは、私たちの生が私たちだけで成り立っているのではなく、若松がいう死者との「協同」によって可能となっていることをあらためて教えてくれる。

このような「二重のまち」における地質学的生への着目は、記憶の政治学をめぐる新たな問題を提起している。瀬尾は、『二重のまち／交代地のうた』のあとがき「二重になる」ということにおいて、興味深いエピソードを紹介している。瀬尾が広島原爆資料館で開催されていた被曝体験伝承講話に通ったときに、ボランティアガイドのおじいさんから追悼平和記念館の地下にある地層の標本を見せられ、被曝跡地をかさ上げて作られた平和記念公園の地下には多くの被曝遺物が埋められたままになっていることを教えられる。そのおじいさんは、愛おしそうに地層標本を指でぞりながら、「何にもなかったと思われるのが一番悲しい」とつぶやいた (瀬尾

2021: 243)。確かに広島は原爆の悲惨な被害を受けたが、それ以前にもそこにはまちがあって、人々の暮らしがあって、それぞれの生が展開していたのだ。原爆の被害の恐ろしさや、一瞬で瓦礫と化した広島のみちがいかに復興してきたのかを強調するだけでなく、それ以前にも人々はそこでそれぞれの生活を営んでいたということ、そうした一つ一つの生が原爆によって突然断ち切られてしまったということ、時間的な連続性の中でとらえる必要があることを、瀬尾は広島でおじいさんから教えてもらったのである。被災後に、どれだけ立派な市街地を再建したのかや、どんなに荘厳な追悼施設を作ったのかが重要なのではない。被災地における現在および未来の生のあり方が、亡くなった人たちが削り取られた山々や巨大な防潮堤によって見えなくなってしまう海などさまざまな人やモノとのつながりにおいて可能になっていることを記憶し、伝えていくこと。「地質学的生」に着目することは、このような意味での記憶の政治学の問題を投げかけているのである。

#### IV. 「希望の空間」としての「二重のみち」

II章の第4節「冬」において、もっぱら過去とのつながりで新しいまちを理解しようとしていた本書が、未来の子どもたちにとっての新しいまちの可能性に賭けてみるという根本的な視座の転換を経験したことを指摘したが、そうした転換は実は被災した人々の間にもみられることである。小森はるかさんが2018年に制作した映画『空に聞く』は、自身も被災者でありながら、「陸前高田災害FM」のラジオ・パーソナリティを務めたある女性（以下、Aさんと記す）の、3年半にわたる活動を描いたドキュメンタリーであるが、その中でAさんは次のように述べている。少々長い引用になるが、重要な語りなので、省略せずに引用したい。

「今からまた、10年、20年って経ってったときに、ねえ、今のまちがまだ、こう、ぼつんぼつんとか建物なくて。自分たちの、身近な存在になりきれていない部分が、こう、ね、あるけど。それが、しっかり馴染んで、昔のみちみたいに、こう、ね、なってくる日が、きつとくるんだらうなあって、思うので、その日を楽しみにしたいなあ、とは思うし。その土台作りを、今、この大人たちが一所懸命やっているっていうかな。それをね、空から見て、自分たちが行った時に、「よく頑張ったな、

お前たち」って。ね、言ってもらえたら、いいなあ。」

（映画『空に聞く』より）

実はAさんは、前述の映画『波のした、土のうえ』で、「津波のあとのある日にね、ここに来たら、私の家がこんな土の山になったの。人の家になんてことしてくれるの。人の思い出の上になんてことしてくれるんだって、私思った」と発言した女性と同じ人である。当初は、自分の実家の跡地を埋めて作られたかさ上げ地に対して反発さえ感じていたAさんが、次第にかさ上げ地に作られた「上のまち」を受け入れるようになっていったことが、前掲の『空に聞く』の引用には表れている。

Aさんは夫と二人で和食料理店を切り盛りしている。当初は高田町のまちなかに開店したが、津波で流されてしまい、数年後にかさ上げ地に作られた新しいまちに店を再建した。そのことによって、彼女の姿勢に大きな変化が現れてきたように思われる。

「でも、この店が始まってからは、前のまちと、今の新しいまちが、別物って言ったらおかしいんだけど。現在と過去を行ったり来たりしながら、ずーっと過ごしてきて、それが、自分たちがここに店を構えて、再スタートを切ったことで、ちょっと前を見るようになったっていうか。ちょっと未来に向けて歩き出したっていう。全然、その、忘れたとか、踏ん切りついたとか、そういうことではなくって。後ろばかり振り返ってたのが、振り返る回数が減って、こう前を見て歩き出した。そんな感じがするかなあ。」

（映画『空に聞く』より）

もちろん、Aさんは「下のまち」を忘れたわけではない。「災害FM」のパーソナリティを退職した後も、陸前高田の高齢者から昔の話を聞く「昔がたりの会」を主宰し、昔の高田のまちの様子を記録に留める活動を続けている。Aさんは、かつてのまち（下のまち）と現在のまち（上のまち）を結びつけ、そのうえで未来のまちを築いていこうとしているように思われる。そして、そのことは「二重のみち」における生者と死者の関係にも再考をもたらしている。

筆者が2020年2月にAさんにおこなった聞き取り調査において、「アバッセから見る空は大好き。大切なものを下に置いてきた気がしていたんだけど、今は上から見てくれるんだなあと思えるようになった。」とAさんは語ってくれた。

新しい市街地に作られた「アバッセたかた」はショッピングセンターや専門店街、市立図書館が一体となった複合施設で、新しいまちの核となることが期待されており、Aさんの新しいお店もアバッセのすぐ近くに立地している。10メートルのかさ上げによって今までよりも少し視線が高くなったことで、「空が近くなったなあ」と感じ、その分少しだけ天上にいる大切な人たちにも近くなったように感じ始めていることが、上の言葉には示されている。これまでは「下のまち」とのつながりを確認することで死者とのつながりを保っていたものが、次第に天上から自分たちを見守ってくれている人たちとのつながりとして感じられるようになってきたことを示している。

こうした変化は、新しく作られた「上のまち」自体への意識の変化としてもあらわれている。Aさんへの聞き取りによれば、当初、Aさん自身「下のまち」を埋めて「上のまち」を作ることへ違和感を感じていた。「土を盛って、その上にまちができていくことは、震災で亡くなった方々も含めてご先祖様を踏みつけてしまうような気がした。そのうえでかさ上げ地を『はい、これが陸前高田ですよ』って言われるのはいやだった」。しかし、「上のまち」にお店を再建して、そこで日々仕事を行って行く中で、「上のまち」に対する見方も少しずつ変わってきた。前述の映画『空に聞く』においてAさんは次のように語っている。

あの、ここのね、勝手口のところのドアを開けて、網戸にすると、その、アバッセの裏側とか、その、海に向かっての南側の風景が見えて、こう、幹線道路がまっすぐ続いているのが見えるんだけど、その風景が、なんか好きだなあって、感じてるのね。何が好きなのか。何も、道路があるけど、まわりにあんまり建物がないから、好きなのか。なんか、新しいまちができてきてるんだなあって、実感させられる。

(映画『空に聞く』より)

ここには、当初、大切な人たちを「下のまち」に「置いてけぼり」にしてしまったと感じ、その上に作られた「上のまち」を受け入れがたかったものが、次第に新しいまちを自分たちと未来のこどもたちが「生きる」場として受け入れ、そうしたまちの風景を好きになり始めている様子が示されている。「二重のまち」が「春」から始まり、「冬」の最後に大きな視座の転換を迎えたことは、Aさんが経験したことを四季の変化の中で象徴的に描き出している。それは

当初、不安や戸惑い、後悔や怒りの感情と結びついてた新しいまちを、いわば「希望の空間」(Harvey 2000)へと転換する地理的想像力の物語なのである。

Gregory (1994) は「地理的想像力 (geographical imaginations)」という言葉を用いて、自明とされる (taken-for-granted) 支配的な地理的イメージや地理的認識に対して、それとは異なるオルタナティブな地理的認識を想像/創造することで、異なる現実を切り開く端緒を探ることを地理学の課題の一つとしている。そこでは地理的認識における想像力の重要性が強調されている。同様のことは、著書『希望の空間 (Spaces of Hope)』において、Harvey (2000) が未来への想像力を発揮して、資本が作り出す支配的な都市空間に対して、ローカルな場所の創造という不断の空間的介入を実践することで、未来の都市空間を想像/創造することの可能性について言及している。「二重のまち」は、冒頭で述べたように、地理的想像力を通じて被災地のもう一つの場所を描き出そうとする試みであり、それは現実には存在しない場所を想像力で生み出す試みでもある。

思想家ベンヤミンは、絶筆となったテキスト「歴史の概念について」において次のように述べている。「過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それを<実際にあった通りに>認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを謂う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史的主体に思いがけず立ち現れてくる、そのような過去のイメージを確保することこそが重要なのだ」(ベンヤミン 1995: 649)。ベンヤミンが提起しようとするのは、過去における(そして現在も続く)支配の事実の単なる追認としての歴史ではなく、そうした支配を覆す可能性を有した被抑圧階級にとっての創造的な時間を取り戻すことである。このようなベンヤミンの歴史の概念を地理的認識にあてはめることは乱暴だろうか。

瀬尾が「二重のまち」において描き出した「下のまち」と「上のまち」という地理的認識は、もちろん<実際にあった通りに>の地理的事実に対する認識ではない。それは被災後の復興の過程において、さまざまな困難に直面した現地の人々との交流を通じて瀬尾が想像/創造的にうみだしたものである。しかし、それは決して非当事者である瀬尾の独りよがりな思い込みの産物ではない。前述のAさんは筆者の聞き取りにおいて「二重のまち」を初めて読んだ時の驚きを、「なんで瀬尾さん、私の心の中がわかるの!? これって私が考えてたこととおんなじよ! って思ったの」と語ってくれた<sup>7)</sup>。被災地の復興において、場所



が持つ意味は多様であり、一つの正解があるようなものではない。しかし、往々にして現実の復興事業はそうした多様な場所の意味に目を向けることなく、万人に妥当するとみなされた普遍的な意味を場所に刻み込もうとする。「二重のまち」はそうした支配的な場所の構築に対して、もう一つの場所を描き出そうとする試みであると言えるだろう。

## おわりに

それでも、人は言うかもしれない。しょせん作品は作品であり、現実ではない。いくら想像力で「希望の空間」を描き出したとしても、現実の場所は何も変わらないのだ、と。とりわけ、現場でのフィールドワークを重視する地理学において、事実に基づかないフィクションについて論じることが、学問的な観点からもその意味を疑問に思う人もいるかもしれない。もちろん事実を正確に伝えることは必要であるが、それは被災した人たちの震災体験を理解し、その声を伝えるうえで、ノンフィクションとフィクション、フィールドワークとアートの、どちらがより力があるか(有効か)という問題ではない。むしろ、そのような二分法がはらんだ「語り」の特権性(有効性)こそが問い直されねばならないだろう。

フィールドワークにおいて「当事者を代弁する」ことの権力性についてはすでに多くの研究があるのでここでは繰り返さないが、以下では最後にフィクション(物語)としての「二重のまち」を読むことの意味について、若干の検討を加えてみたい。

「二重のまち」に描かれた「上のまち」と「下のまち」は、被災前のまちと津波によって破壊されたまち、そしてかさ上げによって作られた新しいまち、これら三つの「まち」を結びつけ、さらにそれらを未来のまちへとつないでいく想像上の場所であり、過去と現在、未来をつなぐトポロジカルな場所である。「いつか新しいまちが出来たとき、そこにいる人たちがきっと、かつてのまちの存在を感じながら暮らしていると想像することで、目の前の喪失が少しはやわらぐのではないかと考えた」という瀬尾(2021: 240)の指摘はそのことを意味している。

しかし、同時にこのトポロジカルな場所としての「二重のまち」は当事者と非当事者が出会う実践的な場所でもある。瀬尾は『二重のまち／交代地のうた』のあとがきにおいて、「二重のまち」を震災の経験を継承する「民話」として位置付けることを提起している。瀬尾によれば、「民話」は時代を超えてそれぞれ

の経験を語り伝える媒体であり、それは無数の人々の協働によって成長し、現在へと伝えられる物語である。瀬尾は、「東日本大震災の後を生き抜く誰しにも、物語が必要なかもしれない」と考え、「二重のまち」を書いたのである。瀬尾はそれを「物語が杖になる」と表現している(瀬尾 2021: 240-241)。

さらにこうした物語の継承は、「民話」がそうであったように、「語り」という営みを通して継承されるものである。瀬尾は、「誰かの身体を通してもらうことで、もうすこししっかり立ち上がってくれるかもしれない」と考え、全国各地で「二重のまち」の朗読会をおこなった。そうした朗読会の積み重ねが最後に映画『二重のまち／交代地のうたを編む』(小森・瀬尾 2019)として結実するのである。紙幅の関係上、この映画について詳しく紹介することは控えるが、ここで重要なことは、こうした朗読会が当事者と非当事者の出会いの場となるということである。朗読会が被災地以外の場所でおこなわれるときは、参加者の全員が非当事者であることもある。そうした中で、非当事者が「二重のまち」を読むことの意味はどこにあるのか。

映画評論家の佐々木敦はこの問いに対して的確に答えている。「非当事者」であるという事実の当事者としての自己に徹底して向き合うこと(佐々木 2020)。すなわち、自らは決して震災の当事者とはなりえないという事実を自覚的に引き受けること。このいわば「非当事者」であることの「当事者性」とでも言うべきものを引き受けることに、どんな意味があるのか。

筆者は、大学の授業で東日本大震災について話すことがたびたびあるし、現地にボランティアとして学生を連れて行くこともある。学生たちの多くはテレビやネット、書籍で東日本大震災について知ってはいる。しかし、それはあくまで傍観者の立場からであり、「わがこと」としては意識していない。しかし、授業で取り上げ、現地に連れて行くことで、学生たちは自分が本当の意味で「非当事者」であり、どんなに現地の人話を聞いても、ボランティア活動をおこなっても、決して当事者にはなりえないことを初めて実感する。言い換えれば、当事者と出会い、向き合うことがない限りは、「非当事者」にさええないのであり、当事者とは何の関係も持たない単なる「傍観者」とどまるのである。その意味で、佐々木が言う「非当事者の当事者性」とは当事者以外のすべての人々が到達しうる、ほとんど唯一の関わり方なのである。そして、こうした関わり方は、自らも非当事者である瀬尾や小森自身が長い時間をかけて



たどりついた立ち位置である<sup>8)</sup>。

「二重のまち」というテキストは、このように、それを読む（あるいは声に出して読む、演劇として表現するなどさまざまな読み方があるが）という行為を通じて、当事者と非当事者、死者と生者が出会い、向き合う場所であり、傍観者から非当事者への転換がおこなわれる場所でもあると言えるだろう。その点を、瀬尾自身は次のように記している。「そして、これはだいたい強引ではあるけれど、実は本書を読んでくださった方たちも、この小さな“継承”の試みの協働者だと私は思っている」（瀬尾 2021: 247）。フィクションとしての「二重のまち」を読むことの意義はここにもあるだろう。

## 謝辞

本稿は2021年度人文地理学会大会（オンライン開催）において発表した内容に加筆修正したものである。会場でご質問いただいた森正人氏、成瀬厚氏はじめ、その後に貴重なコメントをいただいたみなさまにこの場を借りてお礼申し上げます。また、「二重のまち」のテキストやイラスト、および関連する画像の引用・転載をこころよくお認めいただき、さらにお忙しい中で筆者とお会いする時間を作っていただいた瀬尾夏美・小森はるかの両氏に心よりお礼申し上げます。また、陸前高田の現地では、阿部裕美氏に貴重なお話を聞かせていただきました。記してお礼申し上げます。なお、本研究にあたってはJSPS科研費 18H00770の助成を受けた。

## 注

- 1) 福島県では浪江町と双葉町にまたがる海岸沿いの広大な土地で復興記念公園と国営追悼・祈念施設の整備が進められている。
- 2) 熊谷 (2019: 452) は、このような場所の物語を提示することを通じて、研究対象とした「他者」を、同時代を生きるものとして甦らせるような地理的想像力を喚起することこそが、「動態地誌」の課題であると述べる。この指摘は、被災地の問題を考えるうえでもたいへん重要である。
- 3) これら以外に、陸前高田を舞台として小森はるか単独で制作した映像作品として、『息の跡』（小森 2016）と『空に聞く』（小森 2018）がある。
- 4) ただし3人目の住民だけは、本人が朗読を辞退されたため、瀬尾が代読する形になっている。
- 5) この写真は小森はるか撮影した動画から静止画として切り取ったもので、以下のサイトに掲載されていた写真である。撮影者および掲載者の許可を得て本稿に掲載させていただいた。瀬尾夏美Twitter (2015年5月26日) <https://twitter.com/seonatsumi/status/603186311697051650>

- 6) 陸前高田市まちづくりプラットフォーム【高田のはなし】五本松のはなし。 <http://rikuzentakata-mpf.org/takata-hanashi/>【高田のはなし】五本松のはなし（最終閲覧日：2022年1月26日）  
together 2015/5/23 陸前高田「五本松」の巨石、ありがとう会 <https://together.com/li/827625>（最終閲覧日：2022年1月26日）
- 7) 言うまでもないことだが、こうした感想を陸前高田のみなが共有しているわけでは決してない。筆者が参加したある研究会で、『波のした、土のうえ』の上映会がおこなわれた時、陸前高田から参加された一人の住民が、「一つだけ言っておきたいことは、高田の人がみんなこんなふう考えているわけじゃないってことです」と感想を述べてくれた。その意味で、Aさんの感想もあくまで個人的なものにとどまることは確認しておきたい。
- 8) 「震災後文学論」という視点から、東日本大震災に関する文学作品の批評を展開する木村朗子は、「二重のまち」を含む瀬尾夏美の一連の作品が「聞き書き」という手法によって「震災を書けるのはだれか」という当事者性の問題を乗り越える可能性を有していることを指摘している（木村 2021）。

## 文献

- 木村朗子 2021. 震災後文学論2021——あたらしい文学のほうへ。すばる 43(4): 153-167.
- 熊谷圭知 2019. 『パプアニューギニアの「場所」の物語——動態地誌とフィールドワーク』九州大学出版会。
- 小森はるか 2016. 『息の跡』（映画）。
- 小森はるか 2018. 『空に聞く』（映画）。
- 小森はるか・瀬尾夏美 2014. 『波のした、土のうえ』（映画）。
- 小森はるか・瀬尾夏美 2019. 『二重のまち／交代地のうたを編む』（映画）。
- 佐々木敦 2020. 第三の「非／当事者」性にむかって。美術手帖ウェブ版 (4月25日) <https://bijutsutecho.com/magazine/review/21764>（最終閲覧日：2021年1月26日）
- 菅野拓 2012. 東日本大震災避難世帯の被災1年後の状態と生活再建への障壁——仙台市の応急仮設住宅入居者へのアンケートから読み解く生活・居住・就労・貧困研究 9: 86-108.
- 菅野拓 2015. 東日本大震災の仮設住宅入居者の社会経済状況の変化と災害法制の適合性の検討——被災1・3年後の仙台市みなし仮設住宅入居世帯調査の比較から。地域安全学会論文集 27: 47-54.
- 瀬尾夏美 2017. 『二重のまち——二〇一一年、どこかで誰かが見るかもしれない風景』Komori Haruka+Seo Natsumi.
- 瀬尾夏美 2019. 『あわいゆくころ——陸前高田、震災後を生きる』晶文社。
- 瀬尾夏美 2021. 『二重のまち／交代地のうた』書肆侃侃房
- 大門正克・岡田知弘・河西英通・川内淳史・高岡裕之 2013. 『生存』の東北史——歴史から問う3.11』大月書店。
- 大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編

2019. 『「生存」の歴史と復興の現在——3.11 分断をつなぎ直す』大月書店.
- 中田英樹・高村竜平 2018. 『復興に抗する——地域開発の経験と東日本大震災後の日本』
- 復興庁 2021. 東日本大震災からの復興に向けた道のりと見通し. [https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/2021.1\\_michinori.pdf](https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/2021.1_michinori.pdf)(最終閲覧日:2022年1月17日)
- フランクル, V. E. 著, 霜山徳爾訳 1988. 『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録』みすず書房. Frankl, V. E. 1947. *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager*. Wien: Verlag für Jugend und Volk.
- ベンヤミン, W. 著, 浅井健二郎編訳, 久保哲司訳 1995. 『ベンヤミン・コレクション1 近代の意味』ちくま書房.
- マッシー, D. 著, 森正人・伊澤高志訳 2014. 『空間のために』月曜社. Massey, D. 2005. *For space*. London: Sage Publications.
- 無署名 2021. 被災3県のかき上げ宅地 3割以上が未活用、岩手46%. 河北新報オンラインニュース 4月3日 <https://kahoku.news/articles/20210402khn000055.html> (最終閲覧日:2022年1月17日)
- 森正人 2021. 『文化地理学講義——<地理>の誕生からポスト人間中心主義へ』新曜社.
- 矢ヶ崎太洋 2017. 津波災害に対する地域社会のレジリエンス——宮城県気仙沼市舞根地区における東日本大震災と防災集団移転を事例に. 地学雑誌 126: 533-556.
- 矢ヶ崎太洋 2019. 東日本大震災後の人口減少と地域社会の再編——宮城県気仙沼市浦島地区の津波災害とレジリエンス. 人文地理 71: 371-392.
- 矢ヶ崎太洋・吉次 翼 2014. 岩手県陸前高田市における東日本大震災後の都市復興と住宅再建. 地理空間 7(2): 221-232.
- 若松英輔 2014. 『涙のしづくに洗われて咲きいづるもの』河出書房新社.
- 若松英輔 2021. 『魂にふれる——大震災と、生きている死者 増補新版』亜紀書房.
- Gregory, D. 1994. *Geographical Imaginations*. Cambridge MA and Oxford: Blackwell
- Harvey, D. 2000. *Spaces of Hope*. Berkeley: University of California Press.
- Yusoff, K. 2013. Geologic life: prehistory, climate, futures in the Anthropocene. *Society and Space* 31: 779-795.